

平成二十六年 度

神奈川 県公立 高等学校 入学 者選 抜学 力検 査問 題

共 通選 抜 全 日 制 の 課 程

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は問五まであり、1ページから13ページに印刷されています。
- 3 答えは、解答用紙の決められた欄（かん）に、はつきり書き入れなさい。
- 4 解答用紙にマス目（例：

）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号	
	番

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代かなづかいで書きなさい。

- 1 所得と税の額を申告する。
- 2 この地域は養蚕が盛んだ。
- 3 社会に警鐘を鳴らす。
- 4 大地の恵みを食卓で頂く。

(イ) 次の各文中の——線をつけたカタカナを、漢字に直しなさい。(楷書で大きく、丁寧^{ていねい}に書くこと。)

- 1 コピー機で原稿をフクシヤする。
- 2 開校記念の式典でシユクジを述べる。
- 3 その目標を達成するのはシナン^ののわざだ。
- 4 絹糸で布地をオ^る。

(ウ) 次の文中の——線をつけた「の」のうち、同じはたらきをするものの組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

雪^アの降り積もった広場で、近所^イの友だちと時^ウのたつ^エのも忘れて雪合戦をした。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | アとウ | 2 | アとエ | 3 | イとウ | 4 | イとエ |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

(エ) 次の短歌を説明したものととして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

開け放つ虫かごよりぞ十方にいきものがれしたたるみどり

玉井^{たまい} 清弘^{きよひろ}

- 1 虫かごの中で元気をなくした夏の虫たちが秋の草むらに逃れていく様子が、水がしたたるのたたとえられるとともに、その弱い感じがひらがな表記によって効果的に描かれている。
- 2 虫かごから飛び出した夏の虫たちが草むらを元氣よく跳ね回る様子が、行動する範囲の広さを暗示する「十方」の語と、わかりやすいひらがな表記によって具体的に描かれている。
- 3 夏の虫たちが虫かごから草むらへと力強く飛び出していく様子が、多くの虫を連想させる「十方」の語と、漢字かな交じりからひらがなへの表記の変化によって象徴的に描かれている。
- 4 夏の虫たちが開け放たれた虫かごから逃れていく様子が、草むらの中に緑の水がしたたたっていくかのようにたとえられるとともに、ひらがな書きの効果によって印象的に描かれている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「大塔宮（宮）」は、鎌倉幕府を倒すために挙兵したが戦いに敗れ、般若寺に身を隠していた。それを知った敵の兵が夜明け前に押しかけ、寺は五百人余りの兵に四方を取り囲まれてしまった。

宮は透き間もなく取りこめられさせたまひて、御出（脱出できる方法もなく）であるべき方もなくて、すでに御腹を召されんと思

し召して、おし肌腕がせたまひたりけるが、事の叶かなはざるにこそ腹をも切るべけれ、まず隠れてみばやと

思し召して、御堂へ走り入らせたまひたれば、人の読みかけたる大般若（注）の箱三つあり。二つの箱には御経

入れて蓋ふたを開けず。一つの箱は御経半なかば取り出だして、蓋開きたりければ、その中へ飛び入らせたまひて、

御経を引き覆ひ、身を縮めてぞおはしける。

案ごとの如く、兵ども御堂にも乱れ入りて、仏壇の中、天井てんじやうの上まで、残るところなくさがしたてまつる。

されどもさがしかねて、大般若の箱を開けて、底を返してぞさがしける。元より蓋の開きたる箱をば見る

までもなくて、兵、寺中を出でにけり。宮は不思議の御命を生きさせたまひ、夢のやうにて箱の中におは

しけるが、もしまた帰り来て、なほもさがすことやあらんずらんと御思案あつて、先に兵のさがしつる箱

の中へ入りかはりておはしけるに、案ごとの如く、ある兵立ち帰つて、「先に蓋の開きたりつる箱を見ざりつ

るが、不審ふしんに覚ゆ。」とて、御経をうち移して見けるに、からからとうち笑つて、「大般若の箱の中をよく

よくさがしたれば、大塔宮はおはさで、大唐（注）の玄奘げんじやうさんざう三藏さんざうこそありける。」と戯たはむれて、一同3にとつとぞ笑つ

て、門より外へぞ出でにける。

〔太平記〕から。

（注）大般若 中国、唐の時代の僧である玄奘三藏（三藏法師）がインドから持ち帰ったと言われるお経（六百卷）。

大唐 中国の王朝である唐の美称。

(ア) 線1 「御堂へ走り入らせたまひたれば」とあるが、そのときの「宮」を説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 追い詰められて隠れても無駄だとあきらめた「宮」は、敵の兵に捕らえられたときにこそ腹を切るべきだ、まずは戦ってみようと思つて仏殿へ走つて入つた。

2 追い詰められて一度は腹を切る覚悟をした「宮」は、いよいよどうにもならなくなったときに腹を切ればよい、まずは隠れてみようと思つて仏殿へ走つて入つた。

3 脱出できる方法を失つて追い込まれたために腹を切る覚悟をした「宮」は、まずはありがたいお経を唱えて仏に祈ることが大切だと思つて仏殿へ走つて入つた。

4 あまりにもたくさんの敵の兵に囲まれてもどこにも逃げ場はないと思つた「宮」は、まずは隠れて静かになつたら腹を切ろうと思つて仏殿へ走つて入つた。

(イ) 線2 「先に蓋の開きたりつる箱を見ざりつるが、不審に覚ゆ。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 先ほどは蓋が開いていた箱だけしか見なかったが、それでは不安だ。

2 先ほどは蓋が開いていた箱は一つもないと思つたが、不注意だった。

3 先ほどは蓋が開いていた箱を調べなかったが、その箱があやしい。

4 先ほどは蓋が開いていた箱を確認したかどうか、覚えていない。

(ウ) 線3 「一同にどつとぞ笑つて、門より外へぞ出でにける。」とあるが、それを説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 箱の中に隠れていた「宮」を見つけ出すことができた兵は、「大塔」が「大唐」に化けたと笑つて皆でふざけ合いながら「宮」を寺の外へ連れ出した。

2 箱の中には「宮」ではなく「三蔵」がいたと聞いた兵は、人違いだったことを豪快に笑い飛ばしながら次の場所に向かうために寺を出発した。

3 箱の中からは「宮」ではなく「三蔵」の書いたありがたいお経が見つかったので兵は大いに笑つて喜び、「宮」のことなど忘れてお経を寺から持ち出した。

4 箱の中に「宮」の姿がなかったことを「大塔」と「大唐」の音をかけた冗談にして皆で笑い、兵は「宮」がすでにここにはいないと思つて寺を出た。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「宮」は蓋の開いていた箱の中に隠れて兵の目を逃れたが、再び捜しにくることもあるだろうと考え、兵が調べたときには蓋の開いていなかった箱の中に移動したところ見つからずに済んだ。

2 「宮」は箱の蓋を開けるとお経を半分ほど取り出して中に飛び込み、体を縮めながらお経を唱えていたところ、ありがたいお経の力が働いて兵は「宮」の入つた箱の中を調べずに出ていった。

3 兵は寺の仏壇から天井の上まであらゆるところを捜したものの、「宮」を見つけることができなかったので、「宮」が油断して姿を現すのを待つてからもう一度捜しに来ようと計略を立てた。

4 兵は「宮」の隠れていた箱の中も捜しはしたものの、底の方まで調べなかったために見つけることができず、兵が戻つてきてさらに捜そうとする前に「宮」は寺から逃げ出すことができた。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「私（高橋さおり）」は、高校の演劇部の部長である。三年生になった四月、新採用教員として大演劇部の顧問にもなってもらい、ときどき助言を受けていた。そして六月には、演劇の強豪校から転校してきた「中西さん」が入部した。ある日、三年生部員の四人（「私」「中西さん」「西条さん（ガルル）」「橋爪さん（ユッコ）」）は、「吉岡先生」から美術準備室に呼ばれた。

吉岡先生は、いつも以上に真剣な顔つきだった。私たちは、さすがにそれがわかって、緊張して並んで立っていたけど、吉岡先生はすぐに笑顔になって、

「座って。」

と堅い丸椅子を勧めてくれた。それから四人分のコーヒーを入れてくれた。本当は砂糖とミルクがないと飲めないんだけど、それは言い出せない感じ。吉岡先生が、口を開く。

「溝口先生とも話したんだけど……普段、そんなにみんなを追い詰めない私が言うのも何だけど、ブロック大会までは連れて行ってあげられると思う。」

正直、何の話がよくわからなかった。

「連れて行ってあげるなんて偉そうな言い方だし、これも普段の私なら、こんな言い方しないと思うけど、今日だけ、回りくどい言い方をやめて、直球で、真面目に話しますね。高橋さん、前に、高校演劇は二人上手い子がいれば、たぶん県大会くらいまでは楽に行けるって言ってたわよね。」

「えっと、楽かどうかは。」

「楽とは言わなかったかもしれないけど。」

「はい、たぶん、言ったと思います、そんな感じのこと。」

「もう、みんなわかっているとと思うけど、中西さんが入ってきてくれて、今年はそうじゃなくても、西条さんも橋爪さんも、それから高橋さんもいて、本当に層が厚いでしょう。その上に中西さんが来てくれました。」

吉岡先生は、私たちのことをあだ名で呼ばない。どうしてだろう。

「スポーツと違って、記録がとれたり、練習試合ができるわけじゃないから本当のところはわからないけど、でも、みんなも何となく、行けるんじゃないかって気にはなってますでしよう。」

それは、そうだった。練習をときどき見に来てくれる先輩たちも、「県大会、絶対行けるよ、今年。」と口々に言う。自分たちもその気になってきてはいたと思う。

「でもね、県大会目指してたんじゃ、そこ止まりだし、もしかしたら、そこまでも行けないかもしれない。だから、ブロック大会出場、しかも上位入賞を目指したいの。全国までは、みんなも関係がなくなっちゃうし、目標として持ちにくいから、でもブロック大会を目指して、これからの稽古や部活全体のプログラムを組みたい。もしみんながよければだけど。」

私は、私たちは、まだ何を言われているのか、よくわからなかった。いや、意味はわかるけど、それで、わざわざ私たちに言うこと？ わざわざ溝口先生も一緒になって。

黙っていると、中西さんが、口を開いてくれた。

「みんながよければっていうのは、どういう意味ですか？」

「だって、みんなが決めることだから。」

「上を目指すのは、いいと思いますけど。」

「練習が増えるってことですか？」

とガルルが聞いた。私は部長なのに、いつも肝心なときに何も話せない。

「そうね、そういうこともある。高橋さんから合宿をやりたいて聞いてるし。それからブロック大会まで行けば、物理的にみんなを十二月まで拘束します。受験のこともあるから。」

でも、きつと、それだけじゃない。私も高校演劇の指導は初めてだからわかんないけど、たぶん……本当に、本気を出すってこと。もちろん、いままでも本気で頑張^{がんば}ってきたんだろうけど、もう一つ上の、もう芝居しか考えないって感じになるってこと。で、それは、たぶん、いままでみたいに、楽しいだけじゃ済まないかもしれないってこと。」

私たちは、また、堅く黙ってしまった。そんなこと言われても、どう答えればいいの。外では蟬^{せみ}が鳴いている。きつと前から鳴いていたのだろうけど、沈黙が続いて、私たちは蟬の声に包まれる。

「オレも、吉岡先生に相談されてさ、オレは知ってるの通り、演劇のことは全然わかんないんだけど、でも今年のレベルが、断然、高いことだけはわかる。」

溝口先生が、あいかわらずニコニコして、でもさっきのニヤニヤ顔よりは真剣に話しはじめた。

「でね、それが大変だって言う吉岡先生の話は、本当はよくわかんないんだけどね。ただ、オレ、昔、頼まれて二年間だけ男バスの副顧問やってたんだ、前の学校で。前の学校も普通の公立だったんだけど、K市の南高、知ってんだろう、うちとそんなに変わらないレベルだ。それが、たまたま上手いのがやっぱり二人入ってきて、やっぱ偶然二人な、こっちも。ま、百八十五センチくらいある双子な。双子だから偶然って訳でもないけど。」

で、もしかしたらインターハイ狙^{ねら}えるかもしれないって話になって、オレ急遽^{きゅうきょ}かり出されたわけ。実業団の人にコーチとか来てもらって、いろいろ大変でさ。部員も、前からいた奴^{やつ}は、そんなつもりじゃないって感じだったし、バスケは楽しければいいって感じの奴もいたしな、やめた奴もいた、実際、練習が厳しくなって。でも、やっぱり得るものも大きかった。インターハイも行った。一回戦で負けたけどね。本当に、得るものは大きかったと思う。そいつら、いまも毎年、同窓会やってるし、オレもときどき行くけど。」

3 そんなことはわかってるよ、溝口先生。でも、わかってても、このあと、みんなどう答えたらいいのか
がわからないんだ。溝口先生なりの一生懸命の説明も、その気持ちもわかるけど。

「こんなことを。」また吉岡先生は、コーヒーを一口飲んでから続けた。
「こんなことわざわざみんなに言うの、最初にも言ったけど、好きじゃないし、今日で最初で最後にします。じゃあ、どうしてこんなこと言うんだって思ってるかもしれないけど、私は、みんなもちょっとは知ってると思うけど、大学ですつと芝居やって、けっこうのめり込んで、いま思うと、よく単位も教職も取れたと思うけど、五年かかって卒業して、最後の一年半は、さすがに芝居はやめてただけど、卒業の前にもう一回だけやって、後悔はしてないけど、でも怖い世界だっているのは、よく知ってるつもりです。」

楽しいうちはいいけど、やっぱり大変だし、いや、やっぱり楽しいんだけど、楽しすぎて人生変えちゃうかもしれないし、そんなの責任持てないしね。

だから、ブロック大会まで行くっていうのは、私のエゴみたいなもので、でも、こんな素材を前にして、私が少しだけ手伝わしてもらったら、って言うか、これからは少しだけじゃなくて、手伝いでもなくて、本気で指導させてほしいんだけど。いままでは、片手間でやっていてごめんなさい。本気でやらせてくだ

さい、演劇部。本気でやって、ブロック大会まで行こう。」

何分間か時間が経った気がした。実際は数秒だったのかもしれないけど。

「責任なんて、とってもらわなくていいです。」

私は、なんだか、自分でも思ってもみなかったことを口にした。

「私たちの人生なんで。」

格好いい。私のいままでの人生で、一番格好良かったかもしれない。まあ、でもこれも吉岡先生の影響だからな。

「……そうだね。」

4 吉岡先生は、今日初めて、本当に笑った。

「よろしくお願いします。」

ガルルが、とてつもなく大きな声で叫んで、頭を下げた。それにつられて、三人とも、「お願いします。」と言って頭を下げた。そんなこと、普段しそうにない中西さんも、一番深く頭を下げた。

「劇部、ファイトー。」

とユッコが、頭を下げたままで弱々しく言った。それにつられて、みんなも、「オー。」と、なんだかおろおろと言って、そしてみんなで笑った。

(平田 ひらた オリザ「幕が上がる」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 溝口先生 演劇部の正顧問。演劇の経験はない。

全国 演劇の全国大会。翌年度に開催されるため三年生は卒業してしまう。

(ア) 線部「回りにくい言い方をやめて、直球で」とあるが、本文中における意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 説明的な言いまわしにならないよう、自分のことばで丁寧に
- 2 言い訳がましい言い方することなく、結論だけを正直に
- 3 話の内容が偏った方向にいかないよう、強い口調で明確に
- 4 遠まわしに言うのではなく、本当に伝えたいことを率直に

(イ) 線1「えっと、楽かどうかは。」とあるが、ここでの「私」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 「吉岡先生」の話の意味はよくわからないのだが、先生が緊張しているので、何かよくない話なのではないかとだんだん心配になり、どきどきして不安が募っていくように読む。
- 2 「吉岡先生」が「私」たちのことを「上手い」と実力以上に評価してくれていることはありがたいが、先生の期待にこたえることは無理だと感じ、困惑しているように読む。
- 3 「吉岡先生」から緊張した雰囲気の中で急に名指しで尋ねられ、とりあえず「楽」ということばに反応しながらも、先生の真意をはかりかねてとまどっているように読む。
- 4 「吉岡先生」が真面目に話そうとしていると感じてはいるが、話が要領を得ない上に、「私」たちが思い上がっているような言い方をしたので、不満をぶつけるように読む。

(ウ) 線2「きつと前から鳴っていたのだろうけど、沈黙が続いて、私たちは蟬の声に包まれる。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「吉岡先生」の話の意図が理解できなくて答え方がわからなかったために室内が静まりかえり、外の騒がしい蟬の声ばかりがきわ立つ中、時間だけが流れて気詰まりな雰囲気になっている。

2 「吉岡先生」の一方的な提案に違和感を感じてはいても何も反論できずにいたためにいらだちばかりが募り、騒がしい蟬の声がそれに輪をかけてるように響いて、緊迫した雰囲気になっている。

3 「吉岡先生」の強い口ぶりにはじめは緊張して静まりかえっていたのだが、先生の提案の意味がわかってきたことで、外で鳴いている蟬の声に気づける程度に、落ち着いた雰囲気になっている。

4 「吉岡先生」の話が具体的になるにつれて活動への期待が高まり、ことばでは表現できないものの、静けさの中で気づいた蟬の声におられるようにやる気に満ちた雰囲気になっている。

(エ) 線3「そんなことはわかっているよ、溝口先生。」とあるが、「溝口先生」が自分の経験を例にして演劇部の生徒たちに伝えようとしたことは何か。それを説明した次の文中の I・II に入る語句として最も適するものを、I は、「溝口先生」のことばの中から漢字二字で抜き出してそのまま書き、II は、「溝口先生」のことばの中の語句を用い、文意に合うようにして十字以上十五字以内で書きなさい。

演劇部としてブロック大会を目指すことは、I なことかもしれないが、II ということ。

(オ) 線4「吉岡先生は、今日初めて、本当に笑った。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「私」のことが自分の影響を受けて口に出たものであることに気づき、自分が演劇指導したことがきちんと生徒に伝わっていることがわかって、うれしかったから。

2 生徒たちの負担になるといけないのでブロック大会を目指すのはどうしようか考えていたが、生徒たちは思ったよりやる気があると知ったことで、やる気がわいてきたから。

3 演劇部を本気で指導したいという思いを最後に思い切って打ち明けると、「私」から力強いことばがまっすぐに返ってきたことで、生徒たちの思いを理解したから。

4 自信はないものの演劇部を本気で指導させてほしいと頼むと、自信に満ちた「私」のことばによって自分が責任をとる必要がないことがわかり、気が楽になったから。

(カ) 本文中に描かれている「私」について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 ブロック大会に向けて練習が増えてしまうと受験にも影響が出るのではないかと心配になったが、「吉岡先生」の熱意に心を動かされて、少しずつ前向きな気持ちへと変わっていった。

2 「吉岡先生」の言おうとしていることがわからず、何も言えない自分をもどかしく感じていたが、「吉岡先生」のことばにつき動かされて、自分の思いをはっきりと述べることができた。

3 これまで演劇部を本気で指導していなかったという「吉岡先生」のことばに失望したが、それが契機となって、これからは自分が演劇部を背負っていこうという自立した気持ちになった。

4 「吉岡先生」に向かって自分の意見をはっきりと述べられる仲間たちに気おくれしていたが、部長としての責任を意識することで、思っていたことを素直にことばにすることができた。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本ではヨーロッパと異なり、物理的に光を遮断はしない。日本人は庇を深くして光線をやわらげ、障子によってそれを半透明で通過させた。さらにすだれを垂らしたり、朝顔や蔓科の植物を植えたりして、木もれ日を楽しみながら夏の直射日光の跳ね返りを排除した。住環境において、このような工夫をこらしたのが、日本建築の特徴であった。

A、日本において光と影はヨーロッパのように二項対立ではなく、太陽の移動によって濃淡をともなつた無数の段階がみられた。そこから瞬間、瞬間を愛でる美意識が生まれる。日本の詩人も光と闇に関して、きわめて敏感であった。ここにも日本の移りゆく瞬間の美学が強く感じられる。

こうして障子、よしず、のれんは日本の気候風土と深いかわりのなかで生まれ、人びとはその生活に馴染んできた。障子から柔らかな光が差し込み、庭の木々の影も障子に映り、独特の造形美をつくりだす。影も日光や雲の状態によって、一瞬のうちに変化していく。またその薄明かりは、「おもかげ」というイメージと結びつく。障子がつくりだす半透明性が、日本人の繊細な精神性を生みだしてきたといつても過言ではない。ものごとをあからさまにいわない曖昧さの文化も、障子の半透明の文化と密接にかかわっている。

注 谷崎潤一郎は『陰翳礼讃』のなかで次のようにいつている。

もし日本座敷を一つの墨絵にたとえるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は、数寄を凝らした日本座敷の床の間を見ることに、いかに日本人が陰翳の秘密を理解し、光と蔭との使い分けに巧妙であるかに感嘆する。

日本文化の再評価の言葉であるが、現在の生活から見れば、暗くて不便であるけれども、薄明かりの陰影が日本的な独特の情緒をただよわす。日本昔話、怪談の世界は、かつて日本の闇、薄暗がりの背景があつたので、リアリティと迫力が増したのである。

谷崎はヨーロッパ建築を見習つた建物について、「……室内に蔭というものが一つもなく、見渡したところ、白い壁と、赤い太い柱と、派手な色をモザイクのように組み合わせた床が、刷りたての石版画のよう
うに眼に沁み込んで、これがまた相当に暑苦しい。」と苦言を呈している。これはたんに谷崎だけでなく、日本文化を愛でる人の共通した美的感覚であつた。

B 谷崎が金銀の華麗な装飾を否定しているのかといえはそうではない。興味深いことに谷崎は、蒔絵などの絢爛豪華な世界についても次のように述べている。

派手な蒔絵などを施したピカピカ光る鍍塗りの手箱とか、文台とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさえ思えることがあるけれども、もしそれらの器物を取り囲む空
白を真つ黒な闇で塗り潰し、太陽や電灯の光線に代えるに一点の灯明か蠟燭のあかりにして見たまえ、
たちまちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになるであらう。古の工芸家が
それらの器に漆を塗り、蒔絵を画く時は、必ずそういう暗い部屋を頭に置き、乏しい光の中における
効果を狙つたのに違いなく、金色を贅沢に使つたりしたものも、それが闇に浮かび出る具合や、灯火を
反射する加減を考慮したものと察せられる。

もはや解説するまでもなく、ここには日本の美の世界に対する深い洞察がうかがえる。日本にも金箔を用いた工芸作品や襖絵などの伝統があったが、実際にそれを見る場合、部屋は薄暗い状態が多かった。日本独特の**ぶい**金色の美しさは、その背景から生みだされたものである。

したがってヨーロッパと日本では、光と闇の理解が違うので、両者の金色の解釈が異なる。たとえばウィーンの画家クリムトは日本の蒔絵や光琳の絵に影響を受けたが、金をふんだんに使ったかれの代表作に対して、ヨーロッパ人は日本人とは異質な、華麗な金を愛するという感覚で理解したにちがいない。芸術鑑賞においても、それを生みだした風土がいかに大切であるかがわかるのである。

襖と障子はもともと部屋を仕切るために用いられ、襖は仕切りのみでなく、絵を描いて部屋の雰囲気を出し、障子は障子紙を張り、光を導き入れる役割をはたしていた。それは同様に部屋を区切り、開閉が可能である。その場合、絵が描かれる襖絵のモチーフは多様であるが、自然、花鳥風月が描かれることが多く、日本では人びとが自然に囲まれた世界を求めた証である。

障子は開け閉めによって開口部の面積を自由に可変することができる。いうまでもなくそれは、敷居と鴨居の間を障子が移動するからである。障子を開けると、部屋は境界がなくなり、庭の自然と一体化する。春の自然の息吹、夏の濃い緑、秋の落ち葉、寒々とした冬、そして雪景色、その移り変わりを肌で敏感に感じ取ることができる。俳句の季語、時候の挨拶状にみられる細やかな自然観の生まれるゆえんである。

とくに障子は日本の音の文化に貢献してきた。ガラスは音を遮断したが、それと違って障子は音を通越させる。水の音、風の音、虫や小鳥の声、木々の葉のすれる音、季節のなかで暮らしてきた日本人の細やかな感覚とつながる。最も敏感なのは聴覚であって、それは日本の擬声音、擬態音というオノマトペの発達とも深くかかわっている。

水に関して思いつくものでも、チヨロチヨロ、サラサラ、ザアザア、シトシト、ジャブジャブ、ポツポツ、ザブンザブンなど、すぐにいくつか浮かんでくる。風の音でもヒューヒュー、ソヨソヨ、ザワザワ、ゴーゴー、動物の鳴き声でもチュンチュン、カーカー、コロコロ、ニャーニャー、ピーピー、ゲロゲロ……など枚挙にいとまがない。とくに幼児言語、マンガやアニメにもオノマトペはよく登場し、日本人の耳は言語、文化にも大きな影響をおよぼしていたのである。

オノマトペは感覚的な主観を表現するとき多用されるので、客観的表現を重視する欧米語より、情感を重視する日本語の方が多い。また宮沢賢治の童話や小説では独特のオノマトペが、なつかしいノスタルジアを醸し出す。それは自然と一体化して暮らしてきた、先史時代からの日本人の情感を再現するような役割をはたしている。

吉田兼好が指摘するように、もともと日本の風土における、家屋の構造は、夏の高温多湿を凌ぐための先人の知恵が込められていたのである。部屋の通風を考えれば、可変性という開放型の障子が夏には不可欠であったということが理解できる。日本家屋は風通しが第一に考えられ、それによって涼さを求めたのである。逆に冬は炭火を入れた火鉢という局所的な暖房ということになるが、それでも暑さ寒さを自然環境の一部として取り入れてきたのである。

日本人の融通無碍の思想は、自然との折り合いのなかから生みだされてきたといえる。畳はまるで自然の草の上にすわっている印象を与え、家も「風の道」を想定しながら、自然のなかで生活をしてきた日本人の知恵を強く感じることができる。

日本の障子の文化と対照的にヨーロッパのガラスの文化は、外部からの音を遮断し、静寂な空間をつくる。自然を改造し人間中心の世界観を確立しようとするのがヨーロッパの伝統である。そのためにヨーロッパ人は音に対して敏感であり、道路、鉄道でも騒音にきびしい。来日した外国人は日本の鉄道のアナウンスすら、過剰な騒音源と認識し、批判するのである。

(浜本 隆志「窓」の思想史) から。一部表記を改めたところがある。

(注) 谷崎潤一郎 小説家(一八八六—一九六五)。「陰翳礼讃」は日本の光と蔭の文化について書いた随筆。

数寄を凝らした 風流な工夫を施した。

蒔絵 漆で模様を描き、金粉などをつけてつくった工芸品。またその技法。

光琳 尾形光琳(一六五八—一七一六)。江戸時代の画家、工芸家。

モチーフ 主題。

ノスタルジア 故郷や過ぎ去った昔をなつかしむ気持ち。

融通無碍 特定のことにとらわれないことなく自由自在に対応できること。

(ア) 本文中の **A**・**B** に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 A しかし B もっとも 2 A だから B すなわち

3 A したがって B しかし 4 A もっとも B ただし

(イ) 線1「日本の移りゆく瞬間の美学」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 日本の気候風土のなかで光と影が変化するその一瞬一瞬に美しさを見いだす日本人の感性。

2 日本の風物を巧みに利用して、あらゆる光を排除する工夫を凝らした日本建築の美。

3 光と影の濃淡どちらかを美しいと決めることを避ける傾向にある日本人の曖昧な美的感覚。

4 光と影を明確に分類せず、多様なとらえ方をしようとする寛容にして繊細な日本人の精神性。

(ウ) 線2「日本独特のにぶい金色の美しさは、その背景から生みだされたものである。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 豪華な工芸作品は、薄暗い生活空間で暮らしてきた日本人の生活を明るくすることを願って仕事に取り組んだ、昔の工芸家たちの技巧の集大成として存在しているということ。

2 金色をふんだんに使った伝統的な工芸作品は、日本家屋の薄暗い状態で見られることを念頭に、乏しい光の中に金色が、淡く、重々しく見える加減を考えてつくられたということ。

3 金銀の装飾を施した日本の工芸作品や襷絵は、透明性を欠く風土にあってどのような場面でも光の濃淡が生み出す美しさを味わうことができるように考慮されているということ。

4 派手な蒔絵は、日本人がもつ光と影が生み出す美を愛でる感覚のために受け入れられなかったので、意識的に渋い重々しい色合いに変化させたことが伝統となったということ。

(エ) —線3「自然と一体化して暮らしてきた」とあるが、これについて書かれた次の文の□
に入れる語句を、これよりあとの本文中から二十三字で抜き出し、その最初と最後の三字をそれぞれ
のまま書きなさい。

筆者は、日本とヨーロッパを比較する中で、自然とのかかわり方について、日本人が自然と一体
化して暮らしてきたのに対して、ヨーロッパ人は、□立場をとっていると考えている。

(オ) —線4「可変性という開放型の障子」とあるが、障子の可変性が日本人の細やかな自然観を生んだ
理由について、次の条件を満たし、全体で五十字以上六十字以内の一文で書きなさい。

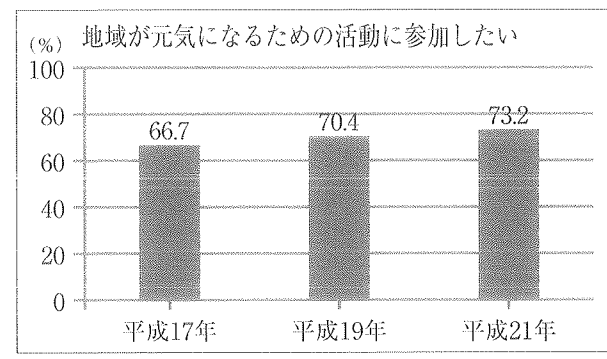
書き出しの「障子を開けると」、という語句に続けて書き、文末は、「から。」で終わること。
これらも全体の字数に入れること。

(カ) 筆者は谷崎潤一郎の文章を引用しているが、その引用の意図について説明したものと最も適する
ものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

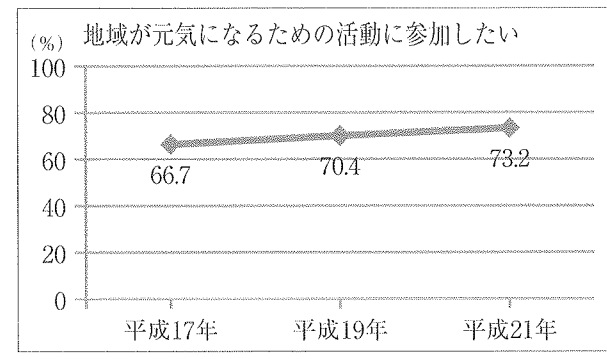
- 1 日本人の光と蔭の使い分けの巧みさを褒め、暗がりの中で美しさを現す日本の工芸作品について述
べていることを引用して、日本人の美的感覚を説明しようとしている。
 - 2 あらゆるものを美しく見せる暗がりの効能と陰翳の美を誇る伝統的な日本建築について述べている
ことを引用して、日本文化の特徴である繊細さを説明しようとしている。
 - 3 光と蔭を操る日本の工芸家の技術の高さに驚嘆していることについて述べていることを引用して、
日本文化とそれを支えた人びとの感性の豊かさを説明しようとしている。
 - 4 床の間のもつ味わいに感動し、暗がりを重んじる日本の歴史について述べていることを引用して、
背景にある日本の風土がいかにすぐれているかを説明しようとしている。
- (キ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。
- 1 障子が日本文化にもたらした影響と、日本の風土と文化の結びつきの大切さの二点について事例を
もとに説明し、批判的な立場からヨーロッパ化が進んだ日本の現状について論じている。
 - 2 文化の象徴としての障子とガラスそれぞれの性質を比較することによって、日本とヨーロッパの違
いを明確にし、谷崎潤一郎の文章を根拠として日本文化の再評価について論じている。
 - 3 障子という日本建築の象徴を話題の中心におき、蒔絵とオノマトペという視点の異なる二つの具体
例を用いて、わずかな光の加減に味わいを見いだす日本人の美意識について論じている。
 - 4 障子を題材の中心におき、光と影に関する美意識と、人と自然の一体化という二つの観点から、ヨー
ロッパの文化との比較を交えて日本の風土、文化、日本人の精神性について論じている。

問五 中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」の発表で使用するグラフの示し方や読み取り方について話し合いをしている。次のグラフ1、グラフ2、グラフ3と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

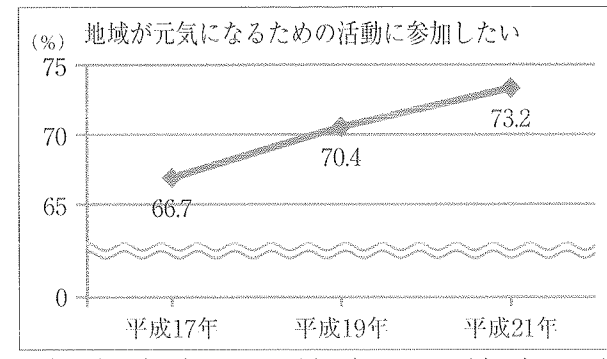
グラフ 1



グラフ 2



グラフ 3



調査人数 平成17年:1551人 平成19年:1667人 平成21年:1919人
内閣府平成21年「地方再生に関する特別世論調査」より作成。

Aさん 私たちは、地域が活性化するためにはどうしたらいいかということを考えてきたのですが、今度の発表で使うグラフを作成していたところ、グラフの示し方について注意しなければならぬことがあることに気がつきました。

住民の意識を聞いた調査結果のうち、「地域が元気になるための活動に参加したい。」と考える人の割合を示すグラフを何種類かつくってみました。同じデータを表したものののですが、Bさん、グラフ1とグラフ2を比べた印象はどうですか。

Bさん グラフ1は棒グラフ、グラフ2は折れ線グラフですが、今回私たちがここで示したいのは、調査の年ごとの変化なので、折れ線グラフの方がわかりやすいように思います。棒グラフでも変化はわかりませんが、棒グラフは量的なものを比べるとときに便利だということを讀んだことがあるので、変化に着目するなら折れ線グラフの方がいいように思いました。

Cさん なるほど、目的に合ったグラフの種類に配慮することで、伝えたい意図をはっきりさせることができるということですね。

Aさん 次にDさん、同じ折れ線グラフのグラフ2とグラフ3を比べた印象はどうですか。

Dさん 三回の調査の変化をみると、グラフ2は、参加したいという人の割合が I ように見えるのに対して、グラフ3は、 II ように見えます。

Bさん 確かにそうですね。グラフ2とグラフ3では、縦軸の目盛りの表示の仕方が違うので、見た目の上で折れ線グラフの傾きが変わっています。グラフの表示の仕方に気をつけないと同じデータでも数値の変化に対する印象が変わってしまうということなのです。

Dさん ということは、たとえば、私の印象そのままに、グラフ2を使って「住民の参加意識は、ほとん

ど変わっていない。」と説明したり、グラフ3を使って「住民の参加意識は、どんどん高くなっていく。」と説明したりすることで、クラスのみんなに違った印象を与えることもできるということですね。

Cさん そう考えると、ふだん私たちはいろいろなグラフを見たり、グラフを使って説明される機会がありますが、はたして、自分できちんと判断して情報を読み取ることができているのでしょうか。そこで、今度は視点を変えて、グラフを読み取る人の立場から考えてみませんか。

Aさん では、グラフの情報を読み取る時には、どのようなことに注意したらよいでしょうか。

Cさん たとえば、グラフのもとになるデータについて考えたとき、もし、調査の人数が十人しかいなかったら、十人のうちのたった一人の考えの違いで十パーセントも数値が変わってしまうし、同じ考えの人ばかりに聞いたら結果は偏ってしまいます。今見ているグラフの調査では、調査人数がおよそ千五百人から二千人と比較的多いから同じ十パーセントでも数字の重みが違うし、調査の対象となる人も全国から偏りのないようにはばらばらに選んでいるということなので、結果も偏ったものにはなっていないと言えると思います。

Dさん つまり、調査の人数と対象の選び方とに着目することが大事ということですね。

Aさん ここまで、グラフの示し方と読み取り方という二つの視点で話してきましたが、それぞれの注意すべき点については、Cさん、Bさん、Dさんがまとめてくれたように思います。改めてこれを視点ごとに整理すると、

グラフの

注意する必要がある。

ということになります。

発表する私たちもグラフを上手に使って、説得力のある発表になるように心がけましょう。

(ア) 本文中の **I**・**II** に入れるものとして最も適するものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を書きなさい。

- 1 上昇の仕方が年ごとに急になっていく
- 2 大きく上昇している
- 3 全く上昇していない
- 4 少ししか上昇していない

(イ) 本文中の **.....** に適する「Aさん」のことを、次の①、②の条件を満たし、全体で七十字以上八十字以内の一文で書きなさい。

① 書き出しの **グラフの** という語句に続けて書き、文末は、**注意する必要がある。** で終わること。これらも全体の字数に入れること。

② 「Aさん」が示した「二つの視点」ごとに注意するべき点について書くこと。

(問題は、これで終わりです。)

